

令和3年度(2021年度)事業計画

事業概要

当法人は、昭和57年(1982年)に「青少年の家キャンピング指月林」を開設し、纖維染色研究所を併設したこの事業場において、青少年を対象に、道徳心のある情操豊かな人間性を養う研修・体験活動の場を提供する淳風美俗育成事業、纖維工業、染料工業に寄与するため、染色の科学的解明と研究成果の文献化を行う学術研究事業を継続しております。

淳風美俗育成事業は、研修・体験等を通して青少年の健全育成に資することを目的とし、後述する六つの個別プログラムにより、青少年が社会生活を営む上での普遍的な規範を自ら学び取ることを目指しています。

学術研究事業では、染色、染料及び色彩に関する研究等を行い、纖維染色研究所に於ける研究を蓄積するとともに染料植物園での染料植物の育成、保存、活用を目標としております。

これらの公益目的事業は、本年度も目標に沿った活動を行い、支えるべき収益事業も従来どおり、公益目的事業に資するという限定目標のもと、不動産賃貸管理事業及び不動産賃貸事業を継続いたします。

公益目的事業の計画概要

1. 淳風美俗育成事業

キャンピング指月林敷地内にあるキャンプ場、研修棟、グランドや染料植物園（研修・体験用及び学術研究用）を活用し、青少年にとって自主的、主体的な活動体験となることに主眼を置いて、各プログラム活動を実行いたします。

前年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、二度の緊急事態宣言にともなう都道府県による各種活動自粛要請によって、経済活動、社会生活、学校生活が大きな影響を受けました。キャンピング指月林も通算で5ヶ月間閉鎖、各団体も活動自粛され、来場者は大幅に減少いたしました。

本年度は、ワクチン接種の効果や医療環境の改善により少しづつ以前の生活に戻ることを想定して、上限人数の設定、三密回避、検温や手指その他の消毒、マスク着用などの感染防止対策を徹底しつつ、例年の50%程度(約800名)の活動を見込みます。

個別プログラムの活動計画は次のとおりですが、それぞれの感染防止対策の徹底を前提といたします。

① キャンピング研修

月平均1～2日の実施を見込みます。

「自然の中での集団による活動・共同生活」を意識してもらい、事前準備と後片付けの徹底、新聞や木片を使っての火起こし、薪での野外料理、テント宿泊を通じて、グループ内での協力はもとより、天候の変化、道具器具の活用、危険回避などにも意識が向くような指導に努めます。

三密回避のため、当面はテント泊を見合わせ、日帰りの活動とします。

② 瞑想研修

来場者全員の参加を得るように進めます。

複数回来場の場合、この時間を楽しみにするという青少年も増えてきました。初来場者には趣旨の説明とともに経験者の感想もお伝えし、また、実施前の講話にも工夫を凝らして当日の主目的に応じた内容とすることにより、体験中の精神集中を高めるとともに、瞑想の習慣化を働きかけます。

室内でのソーシャルディスタンス確保のため、1回の上限を18名とし、活動中も十分な換気を行います。

③ 茶道研修

この研修自体が室内中心で密になりやすく接触する機会もあるため、当面は見合わせる予定ですが、指導者とも十分に協議しながら条件が整うならば開催も視野に入れます。開催に際しては、「お茶に親しみ作法を学ぶ」という目的を踏まえ、実施の都度、対象者の年齢や経験に応じて、作法の意味するところ、茶道の精神、歴史など重点を決めて行う方法を継続します。

④ 作務研修

体験直後に「来たときよりも美しくなった」、「次の人のためにきれいにした」という達成感を感じてもらうことが成果と考え、参加者の人員構成などを踏まえて実施いたします。前に来た人たちが自分たちのためにどうしてくれたか、後に来る人たちのため自分たちに何ができるか、という連鎖を強く意識した内容となるよう努め、来場者全員の参加を求めます。

⑤ 草木染研修

国立青少年教育振興機構の調査結果の一項には、「自然体験やお手伝い、読書をすることが多い子どもほど、生活スキルが高い傾向が見られる」という表現があります。「年代が若くなるほど、子どもの頃の自然体験や遊びが減ってきてている」ということも言われています。この研修では、草木染の染材として植栽している染料植物の見学、摘み取り、準備、染色を一貫して行い、できるだけ季節に応じた染材を選ぶことにより印象に残る自然体験となることを目指します。また、染料植物園内での染材選択の幅を広げる実験とその資料の蓄積についても日常的に実施します。

屋外での活動ではありますが、ソーシャルディスタンス確保のため、上限人数を15名程度とし、かつ2~3名単位で実施し、6回程度の開催を計画しております。

⑥ スポーツ研修

少年期の運動能力向上には、9~12歳が最も大切で、この間に身に付けた能力は一生忘れず、また、その前後は、それぞれにふさわしい運動があるという理論を学習しながら、長期的な視線で取り組みます。一方で、運動する場所や機会に恵まれない団体も少なからずあるという当面の課題も無視できないものがあります。既設の鉄棒と前年度に新設した雲梯と併せて活動を進め、充実を図ります。

ソーシャルディスタンスの確保を意識しながら、6回程度の開催を目指します。

2. 学術研究事業

例年通り纖維染色に関する研究と染料植物園での染料植物の植栽を行います。

纖維染色に関する研究は、年3回開催する纖維染色委員会で、研究テーマや研究内容の協議、意見交換等を行って進めており、その研究成果を公表する「論文集藻光」は、第33号の発刊を計画しています。

染料植物園では、天然染色の材料となる樹木の維持管理、草花系及び野菜・根菜系植物の植栽と収穫及び収穫後の染材（各植物の染色に使用する部位ごと）の保存を着実に進めてまいります。

(1) 纖維染色研究に関する研究

－ 本年度の研究テーマ －

- ① ジアセテート纖維のログウッド染色における添加塩の影響
- ② 和装におけるマスク着用時のイメージ分析
- ③ 「楊梅」^{ヤマモモ}の色素成分と染色性 －修飾絹布における金属媒染の影響－
- ④ 「ハイノキ」の葉を媒染剤とする染色の研究

－ 各テーマの概要 －

- ① 昨年度は、ログウッド抽出色素の染着は、各纖維（セルロース系纖維と呼ぶ）の固有の内部構造の基づく染着サイトの微環境が大きく関わっていることを報告した。このように内部環境の差異により染着性が異なるのであれば、纖維内部に影響をおよぼす化合物が共存すると染着性が変化する可能性が考えられる。現在の綿やレーヨンの実用染色では、助剤として中性塩である硫酸ナトリウムが多用されており、特に反応染料染色には欠かすことができない。添加塩の作用に関してはこれまでに多くの報告があるものの、未だに不明な点も残されており解明に

は至っていない。特に、纖維内部環境への影響についてはほとんど論じられていない。

本年度は塩の添加作用の理解を深めることを目的とし、まず、同じセルロース分子骨格であるものの染着サイトの環境が異なるジアセテート纖維に対しも同様の効果が得られるかについて確かめることから始めたとした。実験では、数種類の塩を選び、ログウッド抽出色素のジアセテート纖維に対する染着性におよぼす影響について検討することとした。

② 新型コロナウイルス感染拡大により、現在ではあらゆるシーンでマスクの着用を強く求められるようになった。毎日着用するマスクは、ファッションの一部となり、様々なカラーが販売されている。今年の成人式の映像では、振り袖のマスク姿を見ると白色のマスクが一番多く目についたが、黒色のマスクの着用もあった。振り袖の地色に合わせているのだろうか。洋装と和装では、イメージが異なるため、和装のイメージに合ったマスクの色があるのではないかと考えた。

そこで、和装時にマスクの“ある”“無し”によってイメージがどのように変わるのでを模索するとともに、和装のイメージに合うマスクの色を検討することを目的とした。

方法は、次の手順を考えている。

- (1) 和装のイメージは、雑誌「美しいキモノ」に記載されているイメージ用語を抽出し、よく使われているイメージ用語を検討する。
 - (2) 和装の着用時にマスクの“ある”“無し”によるイメージ調査。
 - (3) 市販されているマスクの色を収集し、分析する。マスクの色は、分光測色計により、L*a*b*値を測定する。
 - (4) ソフト Photoshop を使ってマスクの色を再現し、官能検査を用いて和装のイメージ用語に合うマスクの色を抽出する。
- ③ 温暖な気候に育つ常緑高木で雌雄異株の「楊梅」(*Myrica rubra Sieb. et Zucc.*)は、樹皮(楊梅皮)にはタンニンや色素成分としてフラボノイド系のミリシトリンが含まれ旧くから薬用としてだけでなく黄色系の染色材料として多用されている。しかし、初夏の6月頃に成熟する実は、ジュースやジャムへの利用が多いものの時期が限られることもあり染色への活用は少ない。その一因として、「楊梅」の色素成分は赤色系のアントシアニンに属するシアニジン3-グルコシド(図1)は既に明らか⁽¹⁾であるが、この色素は溶液pHにより色目が大きく変化すると同時に不安定で分解しやすい性質のため赤色が保持しにくく染色には利用が難しいことが考えられる。

著者は、2020年から公益財団法人覚誉会の「染料植物園」で育成されている「楊梅」を実験に用い、赤系の染色に利用することを目的に、ペーパークロマトグラフィーを用いて色素成分の検討や、pHによる色素の安定性および染色布の色目など基本的な知見を得てきた。

本年度はそのデータを元に、絹布にアニオン化剤を加飾しその色目と赤色発色

の条件を明らかにすると同時に、金属媒染の効果およびその色目についても検討を行う。なお、実験過程および要点としては、次の手順を考えている。

楊梅の染色(1)：絹と加飾処理（アニオン化）の染色条件を比較検討する。

楊梅の染色(2)：加飾処理（アニオン化）の染色後、数種金属による媒染の色目を検討する。

- ④ 前年度の研究では、本邦および外国から集めたハイノキの葉や幹材などハイノキ材による媒染をおこない、コチニール色素で染めて表面色を比較する研究をおこなった。

ハイノキは世界中で利用されている媒染材であるが、本邦でおこなわれてきた使用方法は、それらハイノキ、あるいはハイノキ属の材を燃やし、灰にして媒染に用いている。それに対し、海外における利用方法は、それらの材を焼かずに、摘み取り、あるいは刈り取ったままの生材や乾燥材を用いるという大きな違いがある。

今年度は、コチニールと同様の昆虫色素ではあるが、異種であるラック虫の色素による染色について、ハイノキの生葉を用いた媒染効果を詳細に調べることとした。また、紫根染や茜染めに対して、ハイノキの葉を焼かずに用いて媒染効果が果たしてあるのかに関しても検討する。

（2）染料植物園

染料植物園は、樹木エリアと畠エリアに区分し、それぞれのエリアで天然染料となる染材を採取して草木染研修や学術研究事業に活用しています。樹木エリアでは、染材となる樹木を充実させるため、管理計画に従って剪定、植栽、補植等を適切に実施します。畠エリアでは、季節に応じた草花系、根菜系の染料植物を植栽し、葉、花弁、根などを染材として保存し、時期が合えば収穫体験を通して食育として活用します。前年度、畠エリアの一部に土壤改良を施しましたので、より充実した栽培を目指します。

染料植物園は、各染料植物の名板や樹木プレートを設置しており、オリエンテーションやクイズなどで淳風美俗育成事業においても活用いたします。

II. 収益事業の計画概要

コロナ禍は、前年度同様のわずかな影響にとどまる見込みで、下記事業により公益目的事業の実施に必要な収益は継続して確保できる見込みです。

1. 不動産賃貸管理事業

管理物件数の見込 事業用建物 4棟

2. 不動産賃貸事業

賃貸物件数の見込 事業用土地 2件 以 上